

540 前立腺癌患者における骨シンチグラフィと

腫瘍マーカーの関係

相澤 卓, 栃本真人, 伊藤貴章, 辻野 進, 並木一典,
三木 誠 (東京医大 泌)

前立腺癌の骨転移の病勢をPAPやPSA等の腫瘍マーカーが敏感に反映するならば, 骨シンチグラフィを必ずしも短期間に頻回に行う必要はないのではないかと考え検討した。対象は最近8年間に経験した前立腺癌患者のうち2回以上骨シンチグラフィを行った35例である。骨シンチグラムの変化とPAP, PSA値の推移はよく一致しており, とくにマーカー値が短期間に急上昇した例で骨シンチグラムの悪化所見がよく一致していた。前立腺癌患者のfollow upには特異的マーカーがあるので, 骨シンチグラフィを必ずしも定期的実施する必要はなく, 腫瘍マーカーが急上昇した時や臨床症状などに変化があらわれた時に実施すればよいと考えられる。

541 前立腺癌骨転移におけるオステオカルシン値の評価

桜井正樹, 日置琢一, 奥野利幸, 松浦浩, 川村寿一
(三重大 泌)

骨転移のマーカーとして最近注目されている血清オステオカルシン (OC) を骨転移を有する前立腺癌患者11例, Stage A-D₁患者15例, BPH15例において測定した。

血清OS測定はRIA法(Compagnie Oris Industrie, S.A., France製キット)で行なった。治療前値はStageD₂ 11.6±7.0, とA-D₁ 7.6±3.6, BPH8.5±2.0ng/mlに較べ高値を示したが, 有意差は認めなかった。diethylstilbestrol phosphateにより行なわれた治療前後の変化ではいずれのStageでも有意に低下していた。

骨転移を有する前立腺癌での血清OCは必ずしも高値を示さず, 高値を示す症例のより多数の集積検討と治療法による値の変化の検討も必要と考えられた。

542 前立腺癌の骨転移診断における Early

Whole Body 骨シンチグラフィの有用性

大塚信昭, 福永仁夫, 森田浩一, 小野志磨人, 永井清久,
柳元真一, 三村浩朗, 友光達志 (川崎医大 核)

前立腺癌は高齢者に好発し, 骨転移の頻度が高いことが知られているが, 骨シンチグラフィによる骨転移診断に苦慮する例も少なくない。そこで今回, 前立腺癌患者に骨シンチグラフィの早期全身像を得て, 3時間目の通常の骨シンチグラフィと比較し, 骨転移診断における有用性を検討したので報告する。骨シンチグラフィは^{99m}Tc-HMDP 740 MBq 投与後5分目に前面および後面の全身像を撮像した。Super Bone Scanを呈した症例では早期像で既に正常様骨シンチグラム像が得られ, また多発性の骨転移例では早期像で多発性の異常集積が認められた。なお, 治療により早期の異常集積は低下を示し, 治療経過の観察にも有用であることが示された。

543 脊椎骨・骨転移病巣におけるBONE SPECTの

基礎的検討

下西祥裕, 池田穂積, 大村昌弘 (大阪市大 中放部)
越智宏暢, 岡村光英 (大阪市大 核医学)
牛嶋 陽 (京府医 放)

骨シンチグラフィは骨転移病巣の早期の検出にすぐれているため, 乳癌, 肺癌などのスクリーニング検査として広くもちいられてきた。しかし, 従来よりの前面, 後面2方向のプラナー像では体幹深部の病巣, とくに脊椎骨・椎体前部の骨転移病巣の描出が困難な例があった。

そこで検出能をたかめるためBONE SPECTを適用することを考えハイドロキシアパタイトを材料に用いた脊椎ファントムを製作しそれを用いて脊椎骨におけるBONE SPECTへの基礎的検討を加えたので報告する。

544 骨シンチグラフィにおいて骨盤のみに異常集積のみられた癌症例の検討

中野俊一, 長谷川義尚, 井深啓次郎, 橋詰輝巳, 野口敦司 (大阪府立成人病センター, アイソトープ診療科)

癌患者の骨シンチグラフィにおいて1-2個の異常集積のみられた場合に, これが骨転移によるものかどうかの診断は難しい場合が多い。昨年の本学会では脊椎のみにみられた異常集積について報告したが, 今回は骨盤のみに異常集積のみられた症例について検討した。平成元年1月から2年間に骨シンチグラフィを行った癌症例の内, 骨盤のみに異常集積のみ認められたのは32症例であったがこの中で, 骨X線, CT, 経過観察などから骨転移と診断されたのは, 肺癌7例, 前立腺癌6例, 乳癌4例, その他7例, 合計24例であった。転移以外の病変, 骨盤の中での集積部位の分布, 骨転移の進展の経過, 予後などについて検討した成績を報告する。

545 乳癌骨転移例の骨シンチグラフィ所見と予後について

須藤久男, 仲本宗健, 古田雅也 (松戸市立 放)

乳癌骨転移例の骨シンチグラフィ所見と予後について検討したので報告する。対象は1985年から1990年の乳癌骨転移例42例であり, 全例女性, 平均年齢は52.5歳であった。手術からの平均生存期間は, 約8年5か月であり, 骨転移時期からの平均生存期間は, 約3年1か月であった。

乳癌骨転移例の骨シンチグラフィ異常集積部位は肋骨, 胸椎, 腰椎, 骨盤骨に多く認められた。骨シンチグラフィ異常集積部位の数による生存期間は, 1個35.5か月, 2~4個30.6か月, 5~9個39.6か月, 10個以上39.6か月であり, 骨転移発症時の異常集積部位の数によって予後に差は認められなかった。経時的に異常集積の増加例と異常集積の減少例の生存期間は, 29.4か月, 61.4か月であり, 異常集積の減少例で予後が良好であった。